

シモーヌ・ヴェイユにおける宗教的諸言説の位置付け：後期ヴェイユ思想の受容のされ方に対する一提言

小林敬（京都大学）

しばしば神秘思想的と評される後期シモーヌ・ヴェイユの思想は、1940年代以降のキリスト教との接近を契機として、根本的な立場の転換を迫られた結果であると解されることが多い。彼女の宗教的言説はそうした転換を経た立場から生み出されたものだという理解を前提とした上で、「ヴェイユの宗教思想」なるものを彼女の後期思想の中核として取り上げることに疑義がもたれないという動向がある。このような受容のされ方に対して、発表者は疑問をもつものである。

本発表では、初期から晩年に至るまで一貫して通底する彼女の哲学的な問題意識を明らかにし、後期のヴェイユの宗教的諸言説を彼女の「哲学」との連関で位置づけ直す可能性と必要性を提示したい。哲学者としてのヴェイユの関心の所在は、「デカルトにおける科学と知覚」に代表される初期から、遺著『根づき』に到るまで一貫して、認識についてのラディカルな批判的分析、知の本質規定としての認識論（エピステモロジー）にある、と見るのが発表者の提示したい視点である。認識成立の根拠を問うてゆく、知覚論を中心に据えたこの批判的認識論は、ラシュリエ、ラニョー、アランと連続して継承されてきたフランス反省哲学の中の一系統を、ヴェイユがアラン経由で引き継いだものであると言えよう。

例えば後期の「脱創造（*décreation*）」概念や「自己放棄」を創造の業とする神の観念などは、こうした彼女の認識論的な問題系の一局面として位置付けられる必要がある。あるいは、敢えて言えば一局面にすぎないとまで言えるかもしれない。そして、そのように位置付け直されることによってこそ、後期ヴェイユの宗教的諸言説が、特殊な実定宗教のうちに限定されるものではない、普遍性を持った「宗教哲学」の可能性を拓くものとして重要な価値を持ちうると指摘したい。